

平成 22 年 5 月 6 日現在

研究種目：基盤研究 (c)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520180

研究課題名 (和文) モダニズム芸術における米ソ文化交流の軌跡と黒人知識人の中心性

研究課題名 (英文) The Centrality of African American Intellectuals to the U. S. -Soviet Cultural Exchange in the Era of Artistic Modernism

研究代表者

新田 啓子 (KEIKO NITTA) 立教大学・文学部・准教授

研究者番号：40323737

研究成果の概要 (和文)：本研究は、アメリカ合衆国モダニズム知識人とソヴィエト連邦指導者層およびロシア文化との影響関係、並びにそこで中心的な役割を果たしたのが黒人であったという事実を詳らかにした。かような黒人知識人の活動は、第二次大戦を経て 1960 年代にまでわたったが、それはすなわち、ハーレム・ルネサンスの芸術意識が白人パトロンに主導されるばかりではなく、独自の国際的連携を通じて成熟を遂げていたという事実の証左となった。これにより、本研究は従来のハーレム・ルネサンス理解に修正をもたらした。

研究成果の概要 (英文)：This study has clarified the cultural and artistic connections between the United States and Soviet Russia, particularly ones that African American artists/intellectuals led from the 1920s to the 1960s. The detailed findings regarding such initiatives testify to a unique subject position of the Renaissance artists. Existing researches have demonstrated that their aesthetic subjectivity was inescapably under the colonial as well as commercial influences of white patrons. My study has, on the other hand, substantiated their contradictory independence, by which they tested the validity of their aesthetic concerns through their own international exchanges. Since the present study has verified the strain of activity up to the era of Cold War and Civil Rights Movement, a new dimension of the Harlem Renaissance's political initiative is at the same time authenticated.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ合衆国、ソヴィエト連邦、モダニズム、黒人、文学批評、越境文化、ハーレム・ルネサンス、民族意識

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の着想を得るにあたって最も本質的な役割を果たしたのは、2003～2005 年度

に行った科研費若手研究 (B) 「20 世紀アメリカ文学／文化におけるパッシングの政治学」(課題番号：15720053) であった。この

研究もまた、ハーレム・ルネサンス期の文学表象並びに思想の展開に照準を合わせたものであったが、私が、当時の黒人知識人たちがロシア文化に特別な関心を持ち、同国を訪れたことの重要性に気づいたのは、この研究の推進過程であった。

同研究は、いわば私が20世紀初頭の黒人文学・文化を局地的に考えることを止め、モダニズム一般、そしてアメリカ国民文化一般との力学、または相互性のうちに捉える必要を見出すための知的基盤となった。アメリカ文芸の根源における人種的発想と「黒人」存在のインパクトを探る視軸が、本質化された「黒人集団」の枠組みを超えたところに存在するという理解は、ここでの資料分析から具体的に形成された。

よって私は本研究で、20世紀初頭におけるモダニズムの系譜に置かれてはいるものの、いまだ時代限定的、極地発生的に捉えられているハーレム・ルネサンスの抜本的な再考を図るべく、黒人知識人の対ソ文化交流に着目したのであった。

(2) 本研究が見出した課題は、(1)の知見に基づいて想起された、一般的ハーレム・ルネサンス理解に対する疑問から発していた。

1910年代、南部から北部へ大量に移住した黒人の文化は、都市を拠点とする白人知識人・モダニスト芸術家の関心を捕えるとともに、白人富裕層の資金援助を踏まえ、芸術表現を開花させた。これがハーレム・ルネサンスの一般的な理解である。しかしこの観点は、白人パトロンの影響力を中心に据え、この芸術運動における黒人の自律性・創発性を軽視させる一方、資金的困難をもたらした大恐慌を機に黒人芸術そのものも終息したという、運動の一過性を強調した。

この理解はまさに、戦後から60年代に至り活動を繰り広げたアフリカ中心的・民族主義的な黒人知識人が敵対的に描いた「白人への媚びに満ち、人種的真正さを欠いた運動」としてのハーレム・ルネサンス像の原型となった。本研究の構想は、この理解を実証的に乗り越えることをも、意図していたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、とりわけ1920~30年代に活動を始めたアメリカ合衆国（以下米国）モダニズム芸術家に、当時のソヴィエト連邦指導者層およびロシア文化との影響関係にあった人々が有意に存在したという事実、並びにそうした人々のうちで中心的な役割を果たしたのが黒人知識人であったという事実

に光をあて、その意義を詳らかにすることであった。周知の通り、すでに1910年代前半には形成される米国の反共イデオロギーと、30年代お

よび50年代に顕著となる「赤狩り」は、永らくこうした米ソ文化交流の歴史から、我々の目をそらす政治的背景を作り上げてきた。しかし実際米国は、「共産圏」を絶対的他者と置く「自由主義圏」の指導者という自己イメージを紡いだ冷戦期においてさえ、そのイデオロギーには回収しきれない文化交流主体を抱え続けてきた。本研究は、そうした一つの主体として、アフリカ系アメリカ人、すなわち黒人が中心的に現れる米国学・文化思想史の一端を明らかにすることを目論むものであった。

黒人が米ソ文化交流において中心的な役割を果たしてきた構図は、近現代の米国社会において必然的に形成された。とりわけソ連に対峙した場合、米国は常に自由民主主義国家としての自文化の優位性を喧伝してきたが、黒人に対する抑圧・暴力の歴史は、その国家理念の矛盾を暴露する現実

に他ならなかった。したがって、米国の人種差別社会を弾劾しようとする黒人知識人は、特にヨーロッパにおいて意識的にそうした矛盾を暴露し、差別に反対する国際世論を活性化しようとするのであった。そして、とりわけ彼らが「民衆」解放の可能性を託すべく「共産主義」への関心を高めた時、ソ連およびロシア文化への彼らの傾倒は一層顕著なものとなった。

とはいえ、ロシア文化に寄せられたその関心は、実際には共産主義思想に特化されていたわけではなかった。民族文化への誇りに根ざした自己認識を構築し、黒人固有の表現法（vernacular）の模索に専心したハーレム・ルネサンスの知識人にとり、既存の芸術創作に民族的色彩を織り込んだ「国民芸術」を確立していたロシア／東欧の創作風土は、それ自体、おのれの芸術的野心を先取りするようなモデルの役割を果たしたのである。

こうした知識人たちは、思想家W.E.B. DuBois、詩人Langston Hughes、教育者Louise Thompson、俳優／歌手Paul Robeson等に代表されるが、60年代に至るまで続いた彼らの対ソ文化交流は、女優／歌手Josephine Baker、小説家Ralph Ellison、James Baldwin等、一世代後進にあたる人々に継承されながら、実に公民権運動とは異なった政治・芸術運動の系譜を築き上げていた。

そうした第一世代の知識人の活動は、もとより「ハーレム・ルネサンス」という黒人芸術運動のもとに括られてきたものに相違ない。だが、「米ソ文化交流」という現象を切り口に彼らの活動と思想を見直せば、大恐慌とともに潰えたとされる従来のハーレム・ルネサンス解釈の限定性が乗り越えられる。また同時に、初期モダニズムにおける黒人芸術家の存在が、人種関係をめぐる政治を有機的に導いていたという事実が明らかとなるのである。

ニューヨークのハーレム地区とモスク

ワの関係を進めることはつまり、20世紀米国文化において黒人知識人が果たしてきた役割が、単に人種差別の批判に留まらず、創作の審美性・芸術性や、国民文化をめぐる定義にも影響してきたさまを、具体的に証す可能性を開くのである。このような背景を踏まえた上で、この研究が設定したのは、以下4点の作業であった。

- (1) 1920～30年代にソ連を訪れた第一世代の黒人知識人は、ロシア文化の何に学ぼうとしていたのかを具体的に検証する。
- (2) 同時代の文芸批評の言説分析を通じ、ハーレムとモスクワの文化コネクションが、黒人に留まらない米国知識人の自文化イメージの形成にどう影響していたのかを詳らかにする。
- (3) 件の米ソ文化交流は、ソ連および米国の共産党とはいかなる関係にあったのか、それを特定の代表的人物において個別に記述するとともに、体系化された見取り図の中で把握する。
- (4) 第一世代について検証してきた米ソ文化交流は、第二世代への継承期に激化する東西冷戦下においてどのような展開を遂げたのか、具体的な言説や思想内容に立ち入って解析する。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するため、4ヶ年にわたる研究期間においては、個別に設定したテーマに関し、米国における資料調査・収集および、国内における解釈・分析作業を一貫して進めてきた。

特に重要な人物（Hughes, DuBois, Robeson等）については、彼らの言説が同時代の黒人思想のどこに位置するのかを正確に把握するため、20世紀初頭の黒人文学復刻書籍シリーズおよびモダニズム関連の文学書を体系的に入手、分析した。同時に、ロシアの民衆文化作品、大衆文化の歴史、ならびに共産党の文化政策についての基礎知識を、英語および日本語で手に入る文献から習得した。

他方、私が検証の対象として収集した資料は、文献だけでは留まらなかった。特に歌手として、黒人固有の表現法の確立に意識的であった Robeson、「原始主義」的演技を余儀なくされながらも、文化的自己表現を探究した Baker のキャリアを理解するには、彼らの歌曲を始めとした視聴覚資料の収集が必須となった。またそれは、ジャズ音楽にインスパイアされた Hughes の詩作に関しても同様であった。

以下、実際に遂行した資料収集および分析について、各研究年度別に要点を記したい。

(1) 2006年度には、研究成果の波及効果の大きい Paul Robeson と Langston Hughes の二人に絞った資料分析を行った。彼らが共産党と深い係わりを持つ活動を行ってきたことは、すでに先行研究で明らかにされてきた。

だが、これらの動向に対して本研究が問題視するのは、これら「親ソ的」な黒人知識人の作品や文化・芸術に関する言説に与えられてきた「共産主義的解釈」は、実のところ明示的にそう読める関連文献のみを都合良くまとめたに過ぎないという事実である。

よって同年度には、いわば彼らの対ソ接触の意味は「共産主義への傾倒」には還元できないという仮説のもと、彼らの党派的文書と、その限りではない文献インターテクスチュアルな関連の中で読み解いた上で、「米ソ文化交流」のコンテキストの中で再吟味した。

(2) 2007年度には、特にロシア・アヴァンギャルドおよび民俗文化の美学と政治学に関する研究書や一次資料を入手・検証し、美学および美術史に関する知見を深める基礎的研究を並行しつつ、アメリカ黒人芸術や国民化に対する意識との接点を考察した。

資料収集に関しては、当初マイクロフィルムでしか手に入らない予定であった文書が米国議会図書館や FBI よりインターネット文書の形で公開されたため、それらも活用しながら米国モダニズム芸術における黒人作家の役割と、米ソ文化交流における黒人知識人の中心性に関する概念構築を行った。また国立公文書館にて、黒人知識人の渡欧(特にソ連)を当時のアメリカ政府がいかに認識していたかを調査し、特に 1930年代の外交文書が多数残されていることを確認した。

(3) 2008年度には、Richard Wright および Malcolm Cowley, Edmund Wilson 等モダニズム批評家の黒人文化論の著作をくまなく検討し、芸術思想の中で黒人という主体がいかなる意味を得るにいたったのかについて考察を進めた。

加えて同年度には、この米ソ交流に関する研究から、別の国際関係の裾野が現れてきたため、そちらの資料にも目を配ることになった。つまり本研究が進むにつれ、近代文化における「黒人」とりわけ 1930年代より黒人文化の輸入／翻訳を推進した日本のモダニズム文化のありようが、新たに調査の射程に入ってきたのである。具体的には、一部ソ連経由のアメリカ黒人文学が、日本に影響を与えていたという事実がそれであるが、この事実関係の分析は、Hughes や DuBois を中心に行われた。

(4) 2009年度には、先立つ3ヶ年にわたって収集してきた資料の分析を進めるとともに、

個別的に考察してきた諸問題を、以下、二つの重なりあう問題系としてまとめることに専念した。第一に、1)政治的意識、2)芸術的卓越性の追求、3)文化的越境というモダニズム文学・芸術最大の特徴が、黒人文化の中に具体化される様式および、それが米ソ文化交流の特徴の一端を成しているという事実、さらにはそれに関する活動が孕んだ困難を、Hughes, Wright, DuBois, Ellison 等の著作や社会的活動の中に詳らかにした。そして第二には、白人主流作家 (Henry James, Mark Twain, Jack Kerouac, Gertrude Stein, Djuna Barnes, F. Scott Fitzgerald, William Faulkner 等) の人種観を具体的な作品に即して検証しながら、対する黒人作家・思想家が、文学という手段をもって政治に介入しようとするものの意義を、比較論的に評価・考察した。

4. 研究成果

(1) 「研究の目的」の達成状況

当初予定していた4つの作業に関しては、以下に概略するような事実関係が明らかとなった。

- ① 黒人知識人第一世代は、奴隷解放後においても従属的な地位に甘んじていた黒人を民族集団としてまとめあげるべき思想基盤を、ソ連に求めていた。例えば Robeson は、当時のソ連でより体系的に理論化されていたかに見えた「民衆」を、自らどう演じればよいかという点に関心を持っていた。一方 Hughes は、大恐慌後に疲弊する南部綿花栽培地域を、コルホーズを模した黒人労働の集産体制で復活させる展望を記した。これはいわば、「奴隷」であった人民を、主体的な「労働者」として定義し直そうとする、特に興味深い例であった。
- ② ハーレムとモスクワの文化コネクションは、黒人に留まらない米国知識人の自文化イメージの形成にも影響を与えていた。もとより同じくヨーロッパの辺境に位置する米国とソ連は、自らの「国民文化」とその近代化を語ろうとした芸術家や文化的指導者の意識において、意外にも多くの共通するものを有していた。黒人知識人の活動のみならず、黒人文化をアメリカ芸術固有の伝統とみなすことで、米国の文化的特性と主体性を正当化しようと目論んだ同時代文芸批評も存在した。この手の批評を先導した評論家としては、Carl Van Vechten と V.F. Calverton が顕著であった。
- ③ 黒人のソ連への接近を「共産党」へのコミットメントに還元しないというのが、本研究の視座であった。それを前提として初

めて、多様な民間の左翼思想運動の実態が、検証できるのである。党への介入の深かった Robeson でさえ、H.D.を始めとするモダニストと仕事をすることが多く、ソ連との関係はその一部であった。モダニズムやアヴァンギャルド芸術活動は、社会／共産主義には共鳴するが、プロパガンダに平板化された文学には強い敵意を抱いていた Hughes や Jean Toomer の左翼思想の基盤として、不定形ながらも重要な場であった。

- ④ 第二世代への継承期には、東西冷戦が激化する。親ソ的な黒人知識人に対する国務省や FBI の監視は、1930年代より高まるが、第二次大戦期には、総動員の風潮が人種差別を目立ちにくくしたため、共産党に係わる黒人知識人は減ったかに見えた。一方で戦後、女性労働者の台頭を重視した労働団体は、次々に「黒人差別撤廃」政策の優先度を格下げした。その風潮には、Ellison, *Invisible Man* (1952)のごとく、共産主義への幻滅を描いた文学作品が呼応した。ともに自由や民主主義を謳う米ソ両国のイデオロギーは、黒人問題の解決を切り札としたが、その両方の欺瞞性を意識する知識人が増えていった。

(2) ハーレム・ルネサンスにおける芸術と政治に係わる理解の更新

本研究が探究してきた米ソ文化交流における黒人知識人の中心性は、ハーレム・ルネサンス期に始まり、第二次大戦を経て60年代に至るまで、二世代にわたり検証できるものであった。

この系譜はすなわち、20年代に始まる黒人の芸術意識が、白人パトロンに主導されるばかりではなく、いわば国際的な連携を独自に築くことで、米国の人種社会に対する批判的応答をも導いていたことを証明した。同時にこの事実は、逆に政治的なプロパガンダの色彩が濃く、自立的な芸術としての価値は薄いとされている60年代黒人芸術の「審美性」を再検討するための根拠としても、深い意味を持つと思われる。

つまり米国知識人とソ連との関係が言及される際、その関係は従来、必ずや共産党に対するコミットメントを中心に検証されてきたと言えるが、そのような研究は、芸術思想の内実に入り込むことが殆どないばかりか、研究対象と共産党との関係が決裂すれば、それ以上の事実を調査するための問題意識も放棄するようなものだった。

しかし本研究は、20年代のハーレム・ルネサンスと、急進的な60年代の影に忘却されていた黒人芸術論の有機的な関連性を確認した。このことは究極的に、60年代黒人文学史の再構築を促すことともなり、ひいては20世紀米

国文化の一般的理解を見直す可能性をも導くのである。ここで可能となった黒人芸術思潮は、黒人の美学と政治学の両方と多大な相互影響の関係にあった米国モダニズムの内実と理解されてよい。

すなわち本研究は、「作品がどの程度マルキシズムを反映したものであるか」というイデオロギイ的影響関係によって、黒人作家とソ連の関係を検証してきた既存の研究へのアンチテーゼを提示した。一方でこうした従来の前提は、黒人文学の作品評価を政治的プロパガンダへの評価と重ね合わせる批評的立場を、長く温存してきたのであった。本研究が検証してきた米ソ文化交流は、左翼思想の可能性に賭けながら、教条的な綱領には疑義を抱き、かつ独自の芸術理念の発展をこそ指向するような芸術家の欲望を跡づけた。

ロシア文化に傾倒した黒人知識人は、確かに共産主義へも傾倒していた。とはいえ彼らの美学と綱領を同一視する読み方は、それ自身が党派的欲望を引き摺る現代黒人文学研究の、一つのバイアスに過ぎなかったのである。

(3) 黒人文学の越境

本研究では毎年、米国へ資料収集に出張した折に、当該分野で定評のある研究者と意見交換を行い、それを外部評価として重んじてきた。つまりそのような研究交流を、プロジェクトの方向性に対する自己点検の糧としてきたのである。

黒人のモダニズムであるハーレム・ルネサンスの研究は、米国でも政治的な理由からあまり進んでおらず、すでに既知のテキストや資料の解釈にも、いまだ不十分な点が多い。本研究は、モダニズムの特徴である政治的意識、芸術的卓越性の追求、文化的越境が、同時代の黒人文化を特徴づけていることに着目し、さらにそれが、米ソ文化交流の要因でもあったことを明らかにしてきた。そして公開された研究成果により、その仮説は正当なものとして認められてきた。

とりわけ米国では、ここ 20 年あまり、大西洋地域における黒人文化の越境への関心が高まっている。その点本研究は、実施過程において、米国からソ連に到達し、さらにそれを超え、日本や中国に至った黒人文学の伝搬・受容の一端をも明らかにした。いわば黒人文化は太平洋側にも越境していたのであった。

本研究では、とりわけ 1930 年代日本文学における「新興芸術派」や「ジャズ文学」の系譜における黒人表象分析の手がかりが開かれた。これは、モダニズム文化の国際性の実像を、さらに深めて提示するという今後の展望を意味している。私は特にこれに係わる様々なテーマを、英米文学専門誌『英語青年』における連載論文において、資料解読のかた

ちで議論してきた。このようにモダニズム期美学を解説・注釈する作業は、本プロジェクトにおける関連書物の整理をより一層進展させた。

米国では特に、米ソの先に現れた「日本」という場への関心が高い。本研究は、2009 年度をもってひとまず終了されてはいるが、この点への研究はさらに継続されており、2010 年以降、国内外の学会において、順次、成果公開される予定になっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 30 件)

- ① 新田啓子「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ第 9 回 race」『Web 英語青年』第 155 巻第 10 号、研究社、2009 年、査読なし。
- ② 新田啓子「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ第 8 回 the Soviet Union」『Web 英語青年』第 155 巻第 9 号、pp. 17-28、研究社、2009 年、査読なし。
- ③ 新田啓子「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ第 7 回 affect (2)」『Web 英語青年』第 155 巻第 8 号 pp. 11-20、研究社、2009 年、査読なし。
- ④ 新田啓子「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ第 6 回 affect (1)」『Web 英語青年』第 155 巻第 7 号、pp. 14-23、研究社、2009 年、査読なし。
- ⑤ 新田啓子「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ第 5 回 mobility」『Web 英語青年』第 155 巻第 6 号、pp. 15-26、研究社、2009 年、査読なし。
- ⑥ 新田啓子「Somebody's Watching Me—大衆性とメランコリー」『現代思想』第 37 巻第 11 号 (pp. 58-63)、青土社、2009 年、査読なし。
- ⑦ 新田啓子「アメリカ解読—資料探訪 第 8 回 Zora Neale Hurston, selections from *Negro* (1934)」『英語青年』第 154 巻第 8 号、pp. 26-29、研究社、2008 年、査読なし。
- ⑧ 新田啓子「アメリカ解読—資料探訪 第 7 回 Jean Toomer, *Cane* (1923)」『英語青年』第 154 巻第 7 号、pp. 20-23、研究社、2008 年、査読なし。
- ⑨ 新田啓子「アメリカ解読—資料探訪 第 6 回 Edmund Wilson, *Axel's Castle: A Study in the Imaginative Literature of 1870-1930* (1931)」『英語青年』第 154 巻第 6 号、pp. 26-29、研究社、2008 年、査読なし。
- ⑩ 新田啓子「アメリカ解読—資料探訪 第 5 回 Constance Rourke, *American Humor: A*

Study of National Character (1931)『英語青年』第154巻第5号、pp. 34-37、研究社、2008年、査読なし。

- ⑪ 新田啓子「アメリカ解説—資料探訪 第4回 Malcolm Cowley, *Exile's Return* (1934)『英語青年』第154巻第4号、pp. 38-41、研究社、2008年、査読なし。
- ⑫ 新田啓子「アメリカ解説—資料探訪 第3回 selected writings of Carl Van Vechten, 1916-1926」『英語青年』第154巻第3号、pp. 36-39、研究社、2008年、査読なし。
- ⑬ 新田啓子「アメリカ解説—資料探訪 第1回 Henry James, *The American Scene* (1907)」『英語青年』第154巻第1号、pp. 42-45、研究社、2008年、査読なし。
- ⑭ 新田啓子「フェミニズム批評と文学研究」『英語青年』第153巻第1号、pp. 14-16、研究社、2007年、査読なし。
- ⑮ 新田啓子「主体的倫理と倫理的行為体」『現代思想』第34巻第12号、pp.227-35、青土社、2006年、査読なし。

[学会発表] (計7件)

- ① 新田啓子「混血の情動—自我と宿命の狭間にて」、日本ウィリアム・フォークナー協会第12回全国大会、2009年10月9日、大学コンソーシアムあきたカレッジプラザ。
- ② 新田啓子「黒いモダニズムと政治からの出口」、第47回日本アメリカ文学会全国大会、2008年10月12日、西南学院大学。
- ③ Keiko NITTA, “Autumn Hearts/「愁」, or, Poetics of memory and Oblivion,” レイ・チョウ コロキウム、2008年7月31日、お茶の水女子大学。
- ④ Keiko NITTA, “Response to Senaha Eijun: Reading Hybridity at a Time Out of Joint,” Nagoya American Studies Summer Seminars 2008. July 27, 2008. Nanzan University.
- ⑤ 新田啓子「アメリカ文化・国家と恐怖 テロはどこにあるのか」第78回日本英文学界全国大会、2006年5月21日、中京大学。

[図書] (計5件)

- ① 下河辺美知子編、新田啓子他10名分担執筆『アメリカン・テロ—内なる敵と恐怖の連鎖』、pp.117-38、彩流社、2009年6月。
- ② [訳書] トリーシャ・ローズ著、新田啓子訳。みすず書房、『ブラック・ノイズ』2009年、361+xxi pp.
- ③ 竹村和子編、新田啓子他10名分担執筆、『ジェンダー研究のフロンティア第5巻 欲望・暴力のレジーム』、pp.124-41、作品社、2008年。
- ④ 上杉忍、巽孝之編、新田啓子他10名分担執筆、『シリーズ・アメリカ研究の越境1 アメリカの文明と自画像』、pp.207-32、ミネ

ルヴァ書房、2006年。

[その他]

ホームページ等

「アメリカのプロファイル—文学研究へのアプローチ」(2009年4月～現在) 研究社電子書籍『Web 英語青年』連載 URL : http://www.kenkyusha.co.jp/modules/03_webeigo/

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新田 啓子 (Keiko NITTA)
立教大学・文学部・准教授
研究者番号：40323737